ニッポン ドクター和の 臨終図巻

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

㊴ 夏木陽介

独身貫き生涯青春

昨年末に出版した拙著『男の孤独死』（ブックマン）が、おかげさまで話題になっています。多くの取材を受けますが、「つまり独身男性は孤独死しないために、高齢になってからでも結婚しておいたほうがいいということですね？」と聞いてくる記者がいて少し戸惑います。

独身男性イコール孤独な老後と考えるのは間違いです。既婚者でも妻との折り合いが悪く、孤独死同然で死を迎える男性はいますし、逆に華やかに人生を遂げる独身男性もたくさんいます。

俳優の夏木陽介さんにも、最期まで華々しく好きなことに生きた独身貴族のイメージがあります。

1月14日、81歳で亡くなった夏木さんに腎がん（腎細胞がん）が見つかったのは2010年のこと。腫瘍は5㌢ほどあり、左腎臓の全摘手術を行いました。

腎がんは、エコーさえすれば見つかりやすいがんです。健康診断やほかの病気の検診などで偶然発見されることもよくあります。

自覚症状として血尿が重要です。血尿が出たら必ず内科や泌尿器科で膀胱（ぼうこう）や腎臓を調べてください。腎臓がんの好発年齢は50～60代、男性に多いがんで、肥満や高血圧、喫煙がリスクになります。

術後のインタビューで夏木さんは「今、インターフェロンを打っているのですが、これが一番つらい」と語っているので、発見時には転移していたのかもしれません。2010年当時は、腎がんに有効な抗がん剤は少なく、インターフェロンなどの免疫療法が一般的でした。現在ではさまざまな分子標的薬が使用可能となり、治療方法は大きく様変わりしています。

がんは完治しなかったものの、その後も大好きなバイクやクラシックカーレースを楽しみ、アクティブにがんとの共存生活を上手に続けていたようです。

しかし昨年秋に肺炎で入院、胸椎にがんが転移していることがわかりました。12月末、脳の転移から意識不明に。その後2週間ほど集中治療室に入りましたが、意識が戻ることはありませんでした。

がん終末期の人が、集中治療室に長期間入るケースは最近あまり聞きません。大橋巨泉さんが同じく集中治療室の最期でしたが…。もしリビングウイル（生前の意思表明）していたのなら、さまざまな延命治療を受けることはなかったかもしれません。

夏木さんは80歳の誕生日、自身のブログにこう書いています。

「これから先は、〈生きる事の原点〉を根本に、仕事は楽しく、遊びは一生懸命に」

傘寿にこんな前向きな決意を発信できた夏木さんは、孤独な老後とは無縁の人生だったのでしょう。

伝説の主演ドラマ『青春とはなんだ』（石原慎太郎原作・原案）から50年経ってもなお、青春の香りを放ち続けた人でした。